

# 子どもを殺す母の愛

—— “*Désirée’s Baby*” におけるレイシズム再考 ——

岡 本 晃 幸

**Synopsis:** This study explores the relationship between mothers’ love and racism in Kate Chopin’s “*Désirée’s Baby*” (1893). *Désirée* is the victim of a racist patriarchal society in the antebellum South ruled by Armand Aubigny. In French, *Désirée* means “desired,” which implies her passivity and powerlessness. Critics have attempted to identify within the mothers’ love for their children the possibility of salvation from racism and patriarchy. However, *Désirée* herself internalizes racism so deeply that she cannot endure the fact that she is black and kills herself and her baby. She is as racist as Armand. In addition, Madame Valmondé and Armand’s mother does not tell their children that they are not white, which suggests they believe being black is a source of “unhappiness” that should be hidden. Thus, their love is tainted by racism as well. The text ultimately argues that mothers who love their children can be responsible for their death.

## 序

Kate Chopin の “*Désirée’s Baby*” (1893) の先行研究において、*Désirée* と Armand Aubigny はしばしば対立的な構図で分析されてきた。厳格に白人と黒人を区別しようとし、白人ではないとされた瞬間にデジレと赤子を追放するアーマンがレイシスト的かつ家父長制的の価値観を体現するのに対し、南部における女性の無力さが強調され、デジレは犠牲者とみなされる。そして、Madame Valmondé が代表する母の愛にレイシズムからの救いが求められる。例えば、Robert D. Arner は “The possibility that love may offer individual salvation from the evils of racial definition is suggested first of all by Armand’s father’s marriage to a Negress and, second, by Madame Valmondé’s open acceptance of *Désirée* and her child even after she believes that the girl is part black.” と述べている (141)。

同様に Anna Shannon Elfenbein も, “the world Chopin portrays admits of love that defies the rigid polarities of ‘black’ and ‘white’ in the case of Armand’s parents’ love for each other, Désirée’s love for the baby, and Madame Valmondé’s love for Désirée even after she perceives the color of Désirée’s child.” と主張している (126)。

しかし, ここでエルフェンバインが「赤子に対するデジレの愛」もあげていることには注意が必要である。それは, デジレは赤子をつれておそらく自殺する, つまり彼女はわが子を殺す母親であり, その愛は子どもを殺す愛でもあるとも言えるからだ。このような側面を考えると, 本作における母の愛をレイシズムに対立するものとして単純にとらえることはできないように思われる。

以上をふまえ, 本稿では「デジレの赤ちゃん」における母の愛について論ずる。まず, 先行研究をふまえ, 「デジレの赤ちゃん」においてアーマンという南部白人男性が女性を支配している構図が確認できることを, 特にアーマンの名前に対する執着心に注目しながら示す<sup>1</sup>。その後, 対立するよう見えながらデジレとアーマンがともに激しいレイシズムを宿しているという共通点を明らかにしつつ, 最終的に本作における母の愛とレイシズムの関係について考察したい。

## 1. 名前のない女

まず, Ellen Peel が指摘するように, この短篇の舞台となるアンテベラム期のクレオール共同体が, “master over slave, white over black, and man over woman” という二項対立的構図に基づく家父長制的社会であることを確認したい (224)。そのことは, マダム・ヴァルモンドが四週間ぶりにデジレと赤子に会うために, オービニー家の地所である “L’Abri” を訪れる場面に暗示されている。彼女はラブリを一目見ると “shuddered” する (241)。そこはもう何年も “the gentle presence of a mistress” を知らない場所であり, 檜の木が “a pall” のような影を落としている (241)。アーマ

ンの厳格な支配の下で、黒人奴隷たちは先代の主人が生きていたころのような“how to be gay”を忘れてしまっている(241)。ラブリには「女主人という優しい存在」がいなかったということは、この場所には女性性・母性が欠けていることを暗示している。白人の主人アーマンの下で黒人たちが「陽気になる方法」を忘れてこの場所には、「棺の覆い」が暗示する死の影が立ち込めている。皮肉にもフランス語で「避難所」を意味する「ラブリ」という名前が付けられているこの場所が“no place for a woman or a slave”であることを(Elfenbein 128)、母親として娘のデジレに会いに来たマダム・ヴァルモンドは直観的に感じ取っているからこそ「震える」のだろう。

さらに女性に対するアーマンの家父長制的態度は、名前に対する彼の執着心に見て取ることができる。アーマンが、Monsieur Valmondé にデジレとの結婚を認めてもらえるよう頼む場面で、ムッシュ・ヴァルモンドが彼女は“nameless”だと言っても、アーマンは“What did it matter about a name”と意に介さずデジレと結婚する(241)。しかし、「名前が何だかっていうのですか」という言葉とは裏腹に、アーマンは名前に固執する。デジレがマダム・ヴァルモンドに向かって子どもが生まれてアーマンが喜んでいることを説明する場面で、彼女は“chiefly because it is a boy, to bear his name; though he says not—that he would have loved a girl as well. But I know it isn’t true.”と言う(242; emphasis added)。幸せに包まれているデジレは気づいていないが、この言葉はアーマンにとって子どもとはまずオービニーの名前を継ぐための存在であり、それは男性が家長を務め女性は子どもを産むための存在として男性に管理されるという、ラブリの家父長制的心理構造をあぶり出している。従って、デジレがオービニー家から追放される際にも、“he no longer loved her, because of the unconscious injury she had brought upon his home and his name”とあるのも不思議ではない(244)。彼にとって妻とは自らの望む子どもを産むための存在であり、黒人という望まない子どもを産んで家の「名前」に傷をつけた女性を許すはずはない。

このようなアーマンの名前に対する執着は、ムッシュ・ヴァルモンドに対する彼の発言と一見すると矛盾するようだが、文脈を確認すればそうではないことは明らかである。アーマンは “What did it matter about a name when he could give her one of the oldest and proudest in Louisiana?” (241), すなわち「オービニーという誇り高い名前を与えられるのだから、デジレという女性の名前(姓)などに価値はない」と言っているのだ。この場面はデジレという女性の名前を否定し、一方的に男性の名前を与えるという家父長制的名付けの瞬間<sup>2</sup>と言えるだろう。

さらに、多くの批評家が指摘してきたように、「デジレ」という名前も彼女の本質的な受動性を表している。“*Désirée*”とはフランス語で「望まれるもの」(desired)を意味し、デジレはまわりの人物の欲望を投影する“blank”であるとピールは指摘している(225)。確かに“the idol of Valmondé”として成長し(240)、当初はアーマンに熱烈に愛されるデジレは、その名が示唆する通り他者に「望まれるもの」である。しかし、エルフェンバインが指摘するように、皮肉にもデジレは人生の始まりにおいては父親、終わりにおいてはアーマンという自分が求めた男性に“abandonment”される(127)。そして、自分が愛したアーマンから望まれなくなった時、彼女は自らの存在意義を失う。それゆえに、「デジレ」という名前は一人の個人としての主体性を示すのではなく、その欠如を意味する記号にすぎない。

さらに、ピールは“namelessness”は女性性だけでなく、白人の主人が黒人奴隷の名前を奪うアンテベラム期の社会においては黒人性をも含意すると述べ、デジレと黒人奴隷の女性 *La Blanche* を比較する(225-26)。Cynthia Griffin Wolff など多くの批評家がアーマンはラ・ブランシュと性的な関係にある、つまりレイプしていると解釈している(128)。さらに、デジレはわが子と “One of *La Blanche's* little quadrone boys” を見比べることで赤子が白人ではないことを悟るが(242)、「クアドルーン」という言葉はこの子の父親が白人であることを暗示し、それはアーマンであると複数の批評家が示唆している(Wolff 128; Peel 226; Bauer 171)。アンテベラム期の南部において、快樂という性的欲望と、奴隷すなわち財産を増やすという経

済的欲望のために、白人男性奴隷主が黒人奴隷の女性の肉体を搾取することは珍しくなかった。従ってデジレとラ・ブランシュは白人女主人と黒人奴隷という関係にありながら、片方は妻として夫の名を継ぐための息子を産むことを要求され、もう一方は白人男性主人の性的・経済的欲望を満たすために搾取されるという点において、この二人は共にアーマンという白人男性の犠牲者とみなすことができる。ピールがさらに指摘するように、ラ・ブランシュという名前はフランス語で“white”だけでなく“pure or blank”も意味し、デジレとラ・ブランシュは共に「[固有]の名前」(“a ‘proper name’”)を持たない“double”なのだ(226)。

## 2. デジレはなぜ自殺するのか

以上のように、先行研究において論じられてきた通り、「デジレの赤ちゃん」にアーマンという白人男性奴隷主が女性を支配する家父長制的構図を見いだすことができる。しかし、アーマンという男性とデジレという女性を対立させ、なおかつデジレとラ・ブランシュを分身ととらえる読みにおいて、デジレのレイシズムという重要な問題が見過ごされてきた。以下では、本作におけるレイシズムの問題により焦点をあてて作品を分析してみたい。

デジレが赤子を連れてバイユーへと消えていった後、アーマンは彼女たちの持ち物を燃やすが、その火は「火葬用の薪」を意味する“pyre”で燃やされている(244)。この語は、この場面がデジレと赤子の象徴的な葬儀であることを示している。ただし、この場面でデジレと赤子がどうなったかをアーマンが知っているかは不明だが、仮に彼女が自殺しなかったとしても、アーマンは彼女たちの持ち物を燃やしただろう。そのように考えるならば、アーマンにとってデジレたちが実際に生きているかどうかは重要ではなく、彼女たちが生きていた時からすでに彼の中で彼女たちは「死んでいた」のではないだろうか。

では、アーマンにとってデジレたちはいつ死んだのだろうか。複数の可能性が考えられるが、彼女たちが白人ではないと彼が気付いた時なのではない

だろうか。先に論じたように、アーマンにとってデジレは自分が望む、すなわち白人の跡取りを産むための道具であり、彼女が黒人の子どもを産んだために彼女を捨てる。白人ではないデジレと赤子、すなわち黒人のデジレと赤子はアーマンにとって最早不必要な存在なのだ。そうであるならば、先の象徴的葬儀の場面は、文字通りのデジレと赤子ではなく、「白人のデジレと赤子」の葬儀なのではないだろうか。

この白人と黒人のデジレという区別は、アーマンが抱えるレイシズムの根深さを指し示している。エルフェンバインが“Armand is the only racially obsessed character in Chopin’s story.”と述べている通り (127)<sup>3</sup>、アーマンが白人と黒人の区別に固執することはしばしば指摘されてきた。このようなアーマンのレイシズムに母の愛が対立するという主張は序節でも示した通りである。しかし、アーマンが「人種に憑りつかれた唯一の登場人物」であるとするエルフェンバインは、「人種に憑りつかれた」もう一人の登場人物を見落としている。そのもう一人の登場人物こそ、犠牲者であるはずのデジレである。

そもそもデジレはなぜ自殺するのだろうか。先行研究では、南部家父長制における女性の無力さといったジェンダーの問題にその理由を求め、彼女の自殺の理由をレイシズムのみに還元することが避けられてきた。<sup>4</sup>しかし、少なくとも作品中におけるデジレの反応は、彼女の自殺が明らかに人種と関係していることを示唆している。アーマンに“you are not white”と言われたデジレは、“It is a lie; it is not true, I am white! Look at my hair, it is brown; and my eyes are gray, Armand, you know they are gray. And my skin is fair,’ seizing his wrist. ‘Look at my hand; whiter than yours, Armand,’ she laughed hysterically.”と反応する (243)。それまでの純粹無垢な彼女と違い、デジレは自分が白人であると必死に主張している。

結局アーマンに白人であることを否定されたデジレは、救いをマダム・ヴァルモンドに求め、“My mother, they tell me I am not white. Armand has told me I am not white. For God’s sake tell them it is not true. You must know it is not true. I shall die. I must die. *I cannot be so unhappy,*

*and live.*”という手紙を送る (243; **emphasis added**)。ここでもデジレは自分が白人であることに固執してゐる。結局マダム・ヴァルモンドは返事で彼女の人種にはふれず、ただ “**My own Désirée: Come home to Valmondé; back to your mother who loves you. Come with your child.**” とだけ書く (243)。デジレが黒人であるかもしれないことを予想していたマダム・ヴァルモンドは、その「事実」を否定しても仕方ないと悟っているのだろう。最後のよりどころを失ったデジレは、自分の手紙の最後にあるように、黒人であるという「不幸」に耐え切れず、死を選ぶ。すなわち、彼女の自殺の原因は、まずなにを差し置いても自分が黒人であることに耐えられないからではないだろうか。<sup>5</sup>このように考えるのであれば、デジレはアーマンと同じぐらい「人種に憑りつかれた」登場人物であると言わざるをえない。

では、なぜ彼女はそれほどに黒人であることに耐えられないのだろうか。この問題を考察するため、W. E. B. Du Bois のいう “**double-consciousness**” の概念を参照したい。デュボイスはアメリカの黒人は “**this sense of always looking at one’s self through the eyes of others, of measuring one’s soul by the tape of a world that looks on in amused contempt and pity**” を持っており、その感覚を「二重意識」と呼んだ (8)。つまり、アメリカの黒人はつねに自分たちを「面白がりつつ軽蔑と哀れみ」をもって見つめてくる白人の視線を通してしか、自己を見つめることができないというのである。この二重意識の構造は、デジレの視線の構造にも当てはめることができる。黒人奴隷制の南部で育ったデジレは、その無垢な見た目と反し、人種差別的な価値観を身に付けてきたはずである。白人として生きている間は、その差別的な視線は黒人という他者に向けられていた。しかし、自分が白人ではないとわかった瞬間、その視線を自分に向けざるをえなくなった、つまり白人の視線で黒人としての自己を見つめているのではないだろうか。そして、デジレの拒否反応の激しさとその後の自殺は、彼女がどれほど深く黒人に対する差別的感情を抱いているか、すなわち彼女に潜むレイシズムの根深さを示唆している。

このようなデジレの意識の二重性は、先ほど述べた「白人と黒人のデジ

レ」という区別とも重なる。そして、赤子を連れてラブリを出ていくデジレの描写には、デジレが黒人として生きていけないことが暗示されている。わが子を抱いて誰もいない畑を横切る彼女は着の身着のまま出てきたため、“the stubble bruised her tender feet, so delicately shod, and tore her thin gown to shreds”と描写されている(243)。ここで、彼女の足と衣服が言及されていることは重要である。Emily Toth は悲劇の混血女性のステレオタイプにおいて、足が“as dainty as any Caucasian woman’s”と述べている(98)。「デジレの赤ちゃん」で人種の特徴が表れるとされていた身体的部位が言及されていることを考えると、このデジレの「柔らかな足」も彼女の白人性を暗示していると考えられる。

また、デジレの衣服は彼女の白人としての自己のメタファーとして読める。デジレが着ているのは、屋敷の中という白人女主人として暮らしてきた空間における衣服である部屋着の“*peignoir*”である(242; *italics original*)。しかも、もしマダム・ヴァルモンドが訪ねてきた時と同じものを着ているのであれば、その色は“white”である(241)。一方、今デジレが歩いている畑は、黒人奴隷たちが働く場所という意味において、黒人の空間である。淑女として生きてきた彼女がおそらく生まれて初めて立ち入るのである黒人の空間を、デジレは白人として身に着けてきた衣服をまともま歩いている。それは、白人としての自己という「衣服」を着たまま、黒人として生きていかないといけないこれからの彼女の人生の暗示と解釈できる。そして、その「白い」衣服がずたずたに引き裂かれて、白人性を表わす「柔らかな足」が傷ついていくことは、彼女の白人としての自己が黒人として生きていくことに耐え切れないことを意味しているのではないだろうか。

そうして彼女は自ら死を選ぶのだが、それは白人のデジレが黒人のデジレを殺すとも言えるだろう。そうであるならば、黒人に対する激しい差別意識を宿し、黒人としての自己を殺すデジレは、彼女と赤子が白人ではないと分かった瞬間に死んだものとみなすアーマンとも、実は分身関係にあるのではないだろうか。



### 3. レイシズムと母の愛

このようなデジレのレイシズムは、先行研究において軽視される傾向にあった。その点を批判したのが、Homi K. Bhabha の物神化論<sup>フェティシズム</sup>を援用しつつ、「デジレの赤ちゃん」を含むショパンの作品における悲劇の混血女性のステレオタイプを再検討した Dagmar Pegues である。ペギーズは Christine Palumbo-DeSimone が “the internalization of the ‘racist values’ by Désirée herself, who is ‘literally lost’” を十分に考察していないと指摘する (5)。そして、本作における悲劇の混血女性に対する暴力の最たるものが “Désirée’s foreshadowed suicide and the infanticide of her baby” であり, “Désirée’s internalized system of oppression to black identity allows her to commit infanticide of her mulatto baby (however ambiguously foreshadowed)” と述べる (13)。実は犠牲者とみなされてきたデジレこそが自分と赤子という黒人に対して直接的に暴力をふるう張本人であり、わが子を殺すほどにレイシズムを内面化しているのである。

ペギーズはデジレのレイシズムのみに注目し、デジレと赤子以外も含めた本作における母子関係についてそれ以上考察していない。しかし、デジレの嬰兒殺しがレイシズムに起因するのであれば、母の愛にレイシズムからの救いがあるという、序節で引用したアーナーやエルフェンバインなどの主張を再考しなければならないだろう。確かに、デジレはアーマンに追い出された後、赤子を乳母から無言で奪い取り、その子を抱きながらバイユーへと消えていく (244)。自分の子どもが白人ではないことを悟ってなお見捨てようとしめないデジレは、間違いなくわが子を愛しているだろう。しかし、同時に彼女はその子の命を奪うほどにレイシズムを内面化している。そうであるならば、本作における母の愛はレイシズムに対立するのではなく、むしろレイシズムを内包していると考えたべきではないだろうか。

本作における母の愛とレイシズムの関係をさらに考察するため、アーマンとデジレの関係を再検討したい。二人がともに深くレイシズムを内面化して

いるという点において、分身関係にあることはすでに指摘したが、この二人には重要な場面で「母の手紙を読む」という共通点もある。これが偶然ではないと思われるのは、二人ともそれらの手紙で自己的人種を決定的に知るからである。結末で父に宛てた母の手紙を読むアーマンの場合、そこに彼女が“**the race that is cursed with the brand of slavery**”なのだと書かれているので(245)、この手紙を読むことではっきりと自己的人種を知ることが明らかである。一方、先に引用したように、デジレは自分が白人であると信じるためにマダム・ヴァルモンドにすがすが、彼女は返信でそのことにはふれず、ただ「子どもと一緒に帰ってきなさい」と書くだけだった。この後デジレは自分が白人であるとはもはや主張しなくなる。母親にさえも自分が白人であると言ってもらえなかったデジレは、そこで自己的人種を認めざるをえなくなったのだろう。そのような意味において、彼女が白人ではないことを決定的に突きつけるのは母マダム・ヴァルモンドなのだ。

さらに、手紙の中では母親たちが子どもたちを愛していることが強調されている。アーマンの母親は“**his mother, who adores him**”が黒人だということを、“**our dear Armand**”が知らないことを神に感謝している(245)。つまり、彼女は息子を愛しているからこそ、彼に人種を隠すのだ。明言はされていなくても、手紙で「あなたを愛する母」と書いているマダム・ヴァルモンドも動機は同じだろう。しかし、結局子どもたちは自らの人種を知ってしまう。アーナーが言うように、「それぞれの母親の期待は裏切られ、敗北する」(“**a reversal and a defeat of each mother’s expectations**”)のだ(143)。

だが、そもそもなぜ母親たちは愛するわが子たちに人種を隠すのだろうか。それは、子どもたちが自分は白人ではないこと知らない方が幸せであると、彼女たちが信じているからではないだろうか。マダム・ヴァルモンドはデジレを愛していたからこそ、彼女が白人ではないかもしれないことを知りながら“**the child of her affection**”として育てた(240)。そこに人種を超えた愛の可能性は確かに存在するだろう。しかし、デジレに人種を隠していたことは、彼女もまた黒人であることは「不幸」だとみなしていることを暗

示している。しかし、結局、彼女自身が成長したデジレにその事実を突きつけることになったのであれば、デジレの死の遠因をマダム・ヴァルモントの愛に潜むレイシズムに求めることもできるのではないだろうか。デジレの嬰兒殺しの理由も同じように、彼女の赤子への愛に求めることができるかもしれない。彼女が母への手紙で「こんなに不幸で生きていけない」と書いていたことを思えば、黒人であるという自分と同じ「不幸」をわが子に背負わせないために、共に死ぬという選択をしたということもあり得ないとは言い切れない。それほどにデジレの内面で愛とレイシズムは分かち難く結びついている。この短篇における母の愛は、わが子を「殺す」のだ。

以上をふまえながら、短編の結末を再考したい。Margaret D. Bauer のようにアーマンはすでに自分の人種を知っていて、本作を最初期のパッシング小説と考える批評家もいるが (162)、物語内におけるデジレとの共通点を踏まえると、彼女と同じくアーマンも結末で自分の人種を初めて知ったという読みもやはり可能であると思われる。その場合、アーマンがどのようになるのかについて推測している批評家もいるが、それらはアーマンがこの結末の後も生き続けるという前提である<sup>7</sup>。だがここまで示してきたように、デジレとアーマンは母親との関係において平行関係にある。そして、彼を愛するがゆえに人種を隠した母親の手紙によって自分が黒人であることを知るアーマンも、デジレのように差別的な視線を自らに向けることになるに違いない。そうであるならば、アーマンもまた自らの命を絶つという読みもありえるのではないだろうか。<sup>8</sup>

## 結 論

一見すると、デジレはアーマンが支配する南部家父長制の社会において名前を持たない犠牲者である。しかし、彼女に潜むレイシズムに注目すれば、むしろアーマンとの類似性が見えてくる。デジレは単なる犠牲者ではなく、自らとわが子という二人の黒人の命を奪う。また黒人であるかもしれない捨て子を愛するマダム・ヴァルモントも、白人の男性と結婚するアーマンの母

親も、共に人種を超えた愛の可能性を提示しながら、黒人であるという「不幸」を子どもたちに隠す時、彼女たちの子どもへの愛に潜むレイシズムを露呈する。その結果、マダム・ヴァルモンドは「愛情の子」デジレとその子どもを失う。そして、アーマンもまた命を絶つとするならば、彼が何よりも誇りを抱いていたオービニーの名前を継ぐ者はいなくなり、家は途絶え、後に残されるのはラ・ブランシュとの間にできた黒人奴隷の少年だけとなるだろう。レイシズムを内包した母の愛は、結局息子が守ろうとした南部名家をも滅ぼすのだ。「デジレの赤ちゃん」の結末について、ショパンに強い影響を与えた Guy de Maupassant 流のアイロニーがしばしば指摘されるが、誰よりも子どもたちの「幸せ」を願う母親たちの愛がその子たちを殺すことこそ、本短編における最大のアイロニーなのではないだろうか。

本稿は日本アメリカ文学会北海道支部第 198 回研究談話会（2022 年 11 月 5 日、於 Zoom）において行った発表の原稿に、加筆修正を行ったものである。また藤女子大学の授業における学生との議論の中で多くを学んだことを書き添えておく。

#### 注

1 結末でアーマンが黒人であることが明らかになるが、煩雑さを避けるためかっこなどを付けず白人と記す。

2 エルフェンバインもこの場面に “the transfer of power from father to husband” を見て取っている (127)。

3 エルフェンバインは、アーマンは母親が混血であったことをぼんやりと覚えていて、自分が黒人であることを知っているという前提で引用のように述べているが (127)、後述するように本論ではアーマンは自分が混血であることを知らなかったという解釈をとる。

4 例えば Bauer 179。

5 ただし、デジレの人種はテキストでは明示されておらず本当のところはわからない。また、彼女が本当は自殺しないのではないかという解釈もある (Peel 223)。可能性としてはあり得るかもしれないが、本論で論じている彼女のレイシズムの根深さを考慮すると、自分が黒人であると思いこんだ彼女はやはり自殺する可能性が高いと思われる。

6 例えば、デジレが赤子の爪に言及する箇所があるが (241)、Pamela Knight によると当時黒人的特徴は爪に最初に表れると言われていた (386)。

7 例えば Peel 229-30, Palumbo-DeSimone 132。

8 アーマンが自殺する可能性については、藤女子大学の授業で提出されたある学生のレポートで気づかされた。

### Works Cited

- Arner, Robert D. "Pride and Prejudice: Kate Chopin's 'Désirée's Baby.'" *The Mississippi Quarterly*, vol.25, no.2, 1972, pp.131-40, reprinted in Petry, pp.139-46.
- Bauer, Margaret D. "Armand Aubigny, Still Passing After All These Years: The Narrative Voice and Historical Context of 'Désirée's Baby.'" Petry, pp.161-83.
- Chopin, Kate. "Désirée's Baby." 1893, *The Complete Works of Kate Chopin*, 1969, edited by Per Seyersted, Louisiana State UP, 1997, pp.240-45.
- Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903, Oxford UP, 2007.
- Elfenbein, Anna Shannon. *Women on the Color Line: Evolving Stereotypes and the Writings of George Washington Cable, Grace King, Kate Chopin*. UP of Virginia, 1989.
- Knight, Pamela. "Explanatory Notes." *The Awakening and Other Stories*, edited by Pamela Knight, Oxford UP, 2000, pp.360-407.
- Palumbo-DeSimone, Christine. "Race, Womanhood, and the Tragic Mulatta: An Issue of Ambiguity." *Multiculturalism: Roots and Realities*, edited by James Trotman, Indiana UP, 2002, pp.125-36.
- Peel, Ellen. "Semantic Subversion in 'Désirée's Baby.'" *American Literature*, vol.62, no.2, 1990, pp.223-37.
- Pegues, Dagmar. "Fear and Desire: Regional Aesthetics and Colonial Desire in Kate Chopin's Portrayals of the Tragic Mulatta Stereotype." *The Southern Literary Journal*, vol.43, no.1, 2010, pp.1-22.
- Petry, Alice Hall, ed. *Critical Essays on Kate Chopin*. G. K. Hall & Co., 1996.
- Wolff, Cynthia Griffin. "Kate Chopin and the Fiction of Limits: 'Désirée's Baby.'" *The Southern Literary Journal*, vol.10, no.2, 1978, pp.123-33.